

..... 子どもを帰してからの一時間



須藤良子

さわやかな水色の空に浮かぶ雲も、降りつつく雨のあい間で一きわ美しく、お陽さまの見える今日の日のうれしさをこめているような——そんなことを考えながら、少し先にある誠之小学校に三々五々元気に登校する小

学生の流れの中から幼稚園の門に入る。

「……睨を覚えず」とやらを今頃まで言っているは申訳ないけれど、出勤してから職員室でいただくお茶のおいしいこと、エプロンのひもを結ぶと、「さあ、今日も一日張り切って！」と気が「ぎゅっ」と「せんせい」になる。今日も雨だったら「海の底の魚」を想像して共同製作をと考えていたがこんな良いお天気では、出来るだけたくさん陽に当るようにしなければ。もうすぐおこなわれるPTAリクリエーションの汐干狩の日のこと、そしてこんなに良いお天気の日には、子どもたちを東大のグラウンドにでもつれて行って、若葉の息吹きを吸わせて上げたい……などと職員室で先生がたとの会話はやっぱり子どものこと。やがて園長先生と朝の打合わせ。交通安全週間について、登園下園の際の注意を子どもによく理解させるように、とのこと。

× × ×

保育室の窓を一ぱいにあけ放すと、ふじ棚にそそぐ朝の光がまばゆくぞうきんをすすぐ手も気持が良い。

「せんせ。おはよー。」

「お早うございます。」

次々と元気の良い声がとびこんで来る。

「せんせー。ぼくきょうね。お父さんと自動車で来ちゃった!。」

「そう、会社の自動車?。」

「ちがう!。」

「じゃ、タクシー?。」

「ちがう!。」

「じゃー 何かな?。」

「アノネー 七〇円の自動車!。」

「せんせ! お早うございます。」

「あのねーぼくねちよつとみたら犬がついてくんの、そいで走ったら犬も走るんだもの、ボクこわくなってどんどん走って来たら汗かいちゃった!。」

床屋のよつちゃんは、きれいにわけてもらった髪をもうくしゃくしゃにして汗をふいている。

「ね、ね、せんせい、ぼくのおべんとう今日、のり入ってるか?。」

「そうね、のりが入ってるわ。」

「じゃせんせい、ぼくきょうパンか? ち

がうか?。」

「エート……パンでね、牛乳も入ってるかな。」

二人顔を見合わせて、

「えー? せんせいどうして分かるの?。」
そこへ三人の子どもがおとうばんの表を持って来る。

「せんせー、ねえ、あたし本当はきのうお当番だったんだけど、風邪ひいてお母さんが休みなさいっていったから休んだのよ、だから今日やってもよいでしょ。」

毛糸のふさふさした「しるし」をつけて、お当番になれる喜びは、ともすると休むことさえもいやになる程大きな魅力らしい。今日の番の昌子ちゃんが明日することになって礼子ちゃんは大きな「しるし」を胸につけて元氣にお庭に出て行った。いれ違ひにかけ込んで来た行子ちゃん、
「せんせー! たいへんたいへん。」まさに天下の一大事といういきおい。
「あのね、ちーちゃんが坂の所でベタバタするものの上でころんじやったの、下にいるから早く来て。」

どうしたのかしらと思っただけれど、まわりで何事ならんと見ている子どもたちの視線を感じると、わざと落ちついて

「さあ、お天気が良いからみんなお庭で遊びましょ。」とゆっくり声をかけてから階段をかけ降りた。こぼれた涙をふいたあとをみせてしょんぼり立っている ちーちゃん。話を聞いてみるとドラムカンから流れ出た自動車油のようなものらしい。エプロン、スカート、両手から真っ白い靴下までベトベトする茶色の異様なものがついている。さて、何でふいたものかしら? 大急ぎで電話帳をくって、目についた自動車会社に電話して聞いてみるとベンジンかシンナーあたりだと言う。主任の先生やおぼさんが一生懸命ふいて下さるが、なかなかとれない。保育室にかえてみると、二、三人で絵を書いていた子どもが顔を上げて
「せんせーお早うございます。あたしせんせいより早く来ちゃった。今起きたのせんせい。」床に敷いたゴザの上で組木を囲んで七、八人の男女児が仲良く何やら作っているそばで傍観しているかっちゃん、入れて

「。って言えるようになるまでもう一息。」

そつと保育室を出て庭に行ってみる。適当に湿った砂場には腕まくりした子どもたちの笑顔があふれて、切山やおまんじゅうがポコポコ並んで行く。遊戯室では今や水泳の真っ最中、ステージの上がとび込み台、「よーい。」と片手を上げた良ちゃん、ちよつとお鼻が出かかったがそんな事はおかまいなし、「どーん。」言うが早いか三人並んだ男の子が、「ぼちゃーん。」ならぬ「どたん。」とはらばいになってすいすいほうこくと泳ぐこと。「一ちゃーく!。」立ち上ったら、アラアラエプロンがまっくろ、ズボンまでも、「二ちゃーく。」「三ちゃーく。」立ち上ってかけて行く先にはつみ木が三つ、中の一は一段高くなって、そこには一着のとしかずちゃん、両脇には、つやちゃんとうよしひろちゃん、ゆう然と立ってうれしそうなお顔、きつとオリンピックの選手にもなった気持なんでしょう。思わず私もラジオの実況放送をまねて一声、「一ちゃーく、もりくん。」子どもたちは「わあー。」と声を上げた。絵本をみるへやをのぞいてみ

る。まわりにあるいろいろの本の中で、やすおちゃん、邦和ちゃん、浩ちゃん、まじめに、むちゅうに見入っている。元気にころげ廻って遊ぶ子どもたちの生活の中に、環境さえあればこうして落ちついて本にみ入る姿のあることを、この図書室が出来てから改めて知らされた。静かだった幼稚園のあちこちに生き生きとした子どもたちの声があふれ今日の成長が積まれて行く。

「せんせいさようなら」

「さようなら」

仲良く手をつないで、あるいはおべんとうをかちやかちやいわせながら、子どもたちは元気に帰って行った。青いお目々のシグナルさんは「のうたにはじまって、道路を横断する時の注意をみんなて話している、青はすすめの信号」を知っているとそれぞれ言っていたが、けがをするのはむしろ親といっしょの時に多いようなこと二、三年の例をみても、子どもたちはずいぶん経を使っていると思う。

鳩時計の音が、今動き出したように、よく

聞こえる保育室、四十三人の子どもたちが今日一日に残していったものがまだここかしこに感じられる。すみの机の上にちよんどののっているクレオン。「せんせい、ぼくのクレオンないんだよ。」ってまたあしたも言いそう。家で、一ぱいにちらかして元氣一ぱい遊んでいけば喜ぶおばあちゃん、後片付けなんてかわいそう。このぼくが自分のものをもう少し意識するようになるのはいつかしら。ままごと道具のそばの花びんに、四方正面でなく三方正面位に高さのまぢまぢの花がさしてある。花の好きなけい子ちゃんが、あしたもまた、両手でかかえて水をとりかえるのと思うと、花のむきもそのままにしておきましょう。自由画帖入れの名札のところが一か所光っている。近づいてみたら、一ぺん名札がとれてしまったまりちゃん、つけ直した名札の上をセロテープで幾重にもはりつけて、「これではかんたんにはとれないわ」まりちゃんがまじめな顔をしてはりつけている顔が浮かんできて思わず笑った。今日の出欠——

感染を心配した耳下腺炎もそれほどなく

ほっとした。はじめは弱い弱いと心配している子どもたちが、だんだんになって、それこそ雨が降っても、友だちが休んでも、ひとりで登園出来るようになるのは本当にうれしい。友だちと遊べない子ども、すずんで遊びに入れない子ども、この子どもが、一日一日をすこしていくうちに、はじめの頃を思い出すこともむずかしくなるように、たのもしく成長していく。一日一日の歩みが大きな実績となつて——。私は子ども達の生活の記録のノートを持って、職員室へ降りて行った。

「良いお天気だったわねー」。「ほんとうだね」まず交わされる先生がたの会話、こんな事は普通の人たちには全く当り前の事かもしれないけれど梅雨時のこの一日を、子どもたちが戸外で伸びのびと遊べたことは私たちには本當にうれしいことなのだ。それぞれ保育日誌を前に、今日一日の、あの子ども・この子どもを思い浮かべながら、子どもを帰してからの時間が、子どもと共に流れていく。

(東京・文京第一幼稚園)